

バラ形飾りの裏に差込んだものである、思ふにこれ等の品は天がいの一部分であらう。底部でうつろの圓する形を成した破れがま、三ツ足の香爐、皿、車軸の付屬物らしい小ぶた、車輪らしいものゝ破片、漢式鏡の破片。鐵類では棒、矢、くつわ。

木類では革の残りの着いたくら、となかいその他の獸の彫刻、消炭の引火奴。石類ではメノウの卵形のじゅずや、とぐろを卷いた動物の飾りを付した玉牌。

陶器類では完全な黒い皿およびろくろ製の皿の破片。その他コハク製のじゅずや、鳥馬毛で作つた動物の裝飾具、糸製の網、黒い毛の辯髪、この中には扇形の絹の覆ひの中に納めて飾りの付けたのもある。女のらしい大きな一つの辯髪を、赤いひもで編んだり結んだりしてある。ある墓では十七も辯髪の見出されたのがある。しつ器や織物も出て居るが、これについては後に述べる。

## ◇

支那の史乘には、古來この地方に住んだ民族が、死者のために墓を營んだ有様の大體を記してあるものが無いで  
は無い。史記や漢書の匈奴傳にはその葬法を記して、死者を送るには棺廊、金銀、衣しようなどを用ゐるが、土を盛  
あげてふんを作るとか、樹を植ゑて標しきにするとか、あるひはまた喪服を用ゐることとは無い。その王が死  
ぬる時には、王に近侍して寵愛を得てゐた臣妾の殉死するもの數十人、數百人に至るといふやうな事を記してゐ  
る。降つて隋唐時代の突厥とか、同じ人種の鐵勒とか、キルギスとかいふ民族についても、それぞれ簡単ながら記  
事があり、實際その墓の發掘されたのもある。蒙古時代となるとこの外にまた歐洲人の記事もあつて、やゝ委しい